

## 「本屋さん大賞」を作ろう！

- A 出版界はとにかく不景気で、売れない元気がない、と言われ続けているわけだけど。
- B ほんとに売れないからなあ。元気が出るはずがないよね。
- C なんとか盛り上げたい！
- A でしょ。そのために今日は集まったんだよ。
- D 元気がない書店業界に元気の出るアイデアを出そう。
- A そうそう。いまはそれぞれの書店で、それぞれが元気の出るような企画をやってはいるわけだよ。でも、個々の店で頑張っているだけでも業界全体としては打つ手が見えてこない。取次も出版社も何もしてくれないしね。だったら書店の現場でお祭りのようなイベントをやってみようじゃないか、と言いたいんだ、オレは。
- D お祭りというの？
- A それをいまから考えるんですよ（笑）。
- E お祭りとして盛り上がるにはお客さんにとって面白い企画じゃないとしょうがないですね。出版社も取次も巻き込んで業界全体で盛り上がりませんか。
- A そうはいつでも、出版社は自分のところの本以外の本を売ろうという発想はしづらしいし、取次にはそういう発想自体がない。自分のところの売上げしか考えていないからダメなんだよ。だから現場の書店員ができるしかない。お祭りは滅私奉公、これが基本なんですよ（笑）。みんなが手弁当で騒いで楽しむ。本来、お祭りって誰かが儲かるものじゃないですよ。
- D ただ町が活性化するんですよ。
- A いいこと言っねえ（笑）。そこを狙っていいですよ。
- C たとえば伊坂幸太郎がいま、盛り上がったんじゃないですか。直木賞はとれなくても『重力ピエロ』が話題になったことで、伊坂幸太郎の他の本も売れている。そこで、伊坂さん、どうもありがとうございます、と書店員が賞をあげるといのはどうですか。
- A ほか。書店員賞か。
- B それなら、いつそ、その年いちばん盛り上がった本に賞をあげるほうがいいんじゃない？
- E アメリカに全米書店員が選ぶ賞というのがありますよね。一年でいちばん売ってよかった賞とか、読んで面白かった賞とか。
- D それは誰が選ぶの？ エライ人だけじゃなくて、書店員なら誰でも投票できるわけ？
- B 具体的にはわからないけど、たしかネットで投票するんじゃないか。
- A アメリカにそういう賞があるんなら、日本でも「本屋さん大賞」を作っちゃえばいい。ただ、アメリカをそのまま真似したんじゃないか、面白くないから、日本は日本で独自の賞を作りたいな。
- E 片山恭一の『世界の中心で、愛をさけぶ』にあげるとか。
- A えっ、そういう賞なの？
- C あの本は絶対、何かの賞には選ばれないでしょ。でも、あれだけ売れているわけですよ。だから今年黙っていても売れて、書店員としては嬉しかったという賞をあげたい。
- B 感謝賞（笑）。お世話になったで賞みたいなの。
- D 三年前の本があんなに売れているんだからねえ。でも、どうせなら、他の人に賞をあげたいな。
- C それはアナタが好きな本でいいよ。
- A いや、それでいいんじゃないかな。お祭りとしては一本芯が欲しいじゃない。そうなると、やっぱり「本屋さん大賞」は書店員がいちばん売りたい本でしょう。自分が読んで面白かった本の中でいちばん売りたいという一冊を選んで、みんなが投票するんだよ。それで大賞を決定する。
- E どうやって投票するわけ？
- A それはこれから考える（笑）。とにかく公平かつ透明、ガラス張

りの中で選んで、不正も組織票もない、誰もが納得するような形で決める。

B 全国の書店員で応援してあげたい一冊を選ぶということね。

C 応援したいとなると、面白い

というののもちろんだけど、期待値みたいなのが入るじゃないですか。作品の完成度になると、私たちは素人だから、わからないけど、これが発端になって、他のものも売れるんじゃないかって心配を感じる本がある。それは売りたい、応援したい、と思うんですけど、そういうのはダメ？

D 売りたいとなると、完成度よりも、これからすごいを出しそうでわくわくしたぜ、っていうのを一位にしちゃうな。

A それはかまわないんじゃないかな。だって面白いから売りたいなるわけですよ。つまらない作品はどうやって売れないし、売りたいくならないよ。結果としていい作品にあげることになる。

B ただ、応援したい本を投票す

るにしても、最後に大賞を決めるときはみんなで候補作を読んで、この中では何がいちばん面白いという形で決めていったほうがいいんじゃないかな。単なる人気投票になってもね。

A そうだね。それに投票するとになると、ジャンルが多岐にわたりますと、たとえば書店員だつて趣味は多岐にわたっているわけで、コミックに強い奴もいれば、アート関係に強い奴もいるし、純文に強い奴もいる。そういう人たちがそれぞれに選んできたなら、まず重ならないよね。たとえば百人が投票したとして、十票くらいで大賞が決まったりするんじゃない、やっぱり重みが多くなってしまう。別に権威はいらないけど、公平さがなくなっちゃうような気はするから。

C ある程度ジャンルをしぼったほうがいいね。

D とりあえず、日本の小説でやるのがいいんじゃないかな。

B うん。日本人にあげたほうが

いいね。

D 受賞者がいたほうが盛り上がる。お祭りなんだから。

C じゃあ、日本の小説でその年一年間に出た作品を対象にする。

A うん。ただ、それだけでも膨大な候補作数になっちゃうから、

もうちょっと絞ったほうがいいんじゃないかな。つまり、本屋さん売りたい賞なんだから、もう売れる作家はいいでしょう。

D そうですね。

A もちろんお世話になつてるから感謝の気持ちはあるけど、いまさらわれわれが賞をあげなくてもベストセラー作家は十分売れているわけだし、すでに直木賞を受賞している作家に賞をあげるといって

と自体、おこがましいような気がするし（笑）、読者にとつて、新しい発見でもなんでもないわけですよ。現場の書店員がせっかく選んで、第一回の受賞者は浅田次郎で

した、重松清でしたじゃ、驚きもなにもない。

C でも重松清でも、こんどの新

刊はずごかつたつていうのがあるじゃない。そういうケースだったらいいと思うな。

A いや、つまりこれは現場の書店員が応援してるよ、という賞でしょ。いくら世間が評価しなくても、いくら本が売れなくても、現場では一生懸命売りたい、売って

ますよ、と。そういう作家に与えることによつて、その作家がわつと盛り上がってくれるし、読者にとつても、え？ こんな面白い作家がいたんだ、こんな作品が直木賞の対象にもならず埋もれていたんだという発見になる。

B 功なり名を遂げた作家というのを基準を決めればいいんじゃない。直木賞とつた人はダメとか。

A 賞はとつていてもいいんですよ。直木賞でも。ただそれが売れ行きに結びついていない人。

C それも難しいんですよ。売れ行きは店によつて違うでしょ。

A じゃあ、たとえば刷り部数が単行本で初版一万五千部以上出ている作家はダメとか（笑）。

D それで賞をもらった作家はかわいそうかも。初版で一万五千部以下というのがバレーバレー（笑）。

B いや、いま文芸書で初版一万五千部も刷ってる作家なんて数えるほどしかいないよ。いかに大変な数か。

A 応援しなくても売れる作家は除外すると考えておけば、いいんじゃないの。応援しなければ売れないけど、いい作品を書いている作家が対象。

D それ、言い方としてちょっとマイナスだなあ。応援すれば絶対売れると言い換えましょう。

C そうだね、せつかくの「本屋大賞」なのに、もらっても嬉しくないかもしれない（笑）。

B なんだか大賞だけじゃ面白くないような気がしてきたな。

D 部門賞がいくつあったほうがいいかもしれない。

A それは今後の課題だね。「本屋大賞」が軌道に乗ってきたら、賞を細分化して、物故者にも功労賞、お世話になりました賞でもいいけ

ど、そういう賞をあげていく。亡くなった人でも、ほんとに世話になつたなああって作家がいるじゃない。たとえば司馬遼太郎や池波正太郎は、いまだに延々とお世話になり続けている作家で、本屋大賞が根付いていった折には、なんらかの賞をあげないと申し訳ないと思うよ。読者としても書店員としても、ずっとお世話になりっぱなしだもん。恩返ししておきたいじゃない（笑）。だいたい司馬遼太郎にはこれから先、なんの賞も出ないんですよ！！

D 勢い込んでますねえ（笑）。

A 対象になる賞がないんだから、作ってあげないと。

C そういう形でいろいろ作っていけば面白くなる。ただ、いっぺんに何もかもは作れないから。

A そう。最初は大賞だけのほうがインパクトがあるんですよ。

E うーん。いまさらだけど、僕は書店員賞って、どうも違和感があるんですよ。書店ってやっぱり各々別の個性があつてしかるべ

きだし、無理やり統一の賞を作つて、同じ本をみんなが店頭で並べるのには抵抗がある。書店全体で何かお祭りをやるっていうのはすごく重要だと思うんだけど、それぞれの書店がお互いに売りたい本を、たとえば三冊発表して、それを店頭で展開する。そこに何か統一の帯をつける、というほうがいいんじゃないかなあ。

B いや、オレだって、そんなみんなで決めたものなんて売れるかよ、って気はあるよ。まして自分が投票した本が大賞に選ばれなかつたりしたら、なんだよ、と思うかもしれない（笑）。でもね、こんなに売れない時期ってなかつたわけよ。ここまでくると、いっぺんみんなで何か一緒にやってみないと本当に盛り上がらない。何か火花をあげないと、どん底に落ちていくような気がするんだよね。

個々に勧めたい本を勧めるというのはすでにやってるんだから、目新しくはないし、それだとお祭りにはならない。やっぱりこは、

ひとつ大賞を決めて、全国で選ばれたのはこれ、だけど、うちの店ではこれだよ、と合わせてやるような期間にするのがいちばんいいんじゃないかな。

E ただ、いま片山恭一が売れているのは口コミで誰々さんがいいって言つたからみたいなの、ものすごく小さい世界の中で自分で見つけた本っていう感覚で買われているからだと思つてますよ。そういう風潮の中で、書店員がこれ売ります！と店頭でやってても、お客さんに喜ばれるのかなあ。

A それはね、他業種で考えてみればいい。たとえばレンタルビデオの世界には、よく店長のおすすめて書かれているのがあるじゃない。そのレンタルビデオの店長がみんな集まって、レンタルビデオ業界店長おすめ大賞を決めるわけだよ。アダルトなんかでそれができた日には、これは借りるしかない。絶対見るよね（笑）。同じことなんだよ。書店だって、書店員が投票して、ひとつの作品が決

まったく言ったら、これはやっぱり手に取りますよ。われわれは現場で仕事をしているから、果たしてそんなものがお客さんにどれだけアピールするのかと疑問に思うかもしれないけど、レンタルビデオ業界に置き換えて考えれば、これは明らかですよ。

E すごくわかりやすい(笑)。  
 B 日本の小説はアダルトビデオだっていうことだ(笑)。  
 C 好きな人しか見てない(笑)。  
 B よく知らないから、これがおすすめだって言われたら、そうか、と思っちゃう。

A 本屋に来る客の心理として、そういう部分ってあるでしょ。だって我々がすすめるような本は、ほんとに好きな人はもう読んじゃってるわけ。本を好きな人を対象にしていたら、こっぴつ企画ってやっても意味がないんだよ。

D めったに本を買わない人が来て、全国の書店員が選んだ売りたい本大賞はこれだ、っていうのを見て買ってくれればいい。

A そう。だからこそ賞を選定するのは意味がある。普段、本を読まない人たちが対象にしなきゃ、十万部も二十万部も売れっこないわけだから。五千七千の世界で騒いだって、お祭りにはならないんだよ。

B 毎年、ひとりずつ送り出していつて、それこそ五万部から十萬部の作家がどんどん誕生していつたら、長い目でみると業界全体はとんでもなく活性化するなあ。

A その可能性だってあるわけ。だから賞の選定の仕方は重要だよ。ね。いかに公正で透明度の高いものにするか。それさえ出来ていれば、参加した書店員は仮に自分の意にそぐわない作品が選ばれたとしても納得すると思う。

D うん。納得するしないは別として、一位になつたのは厳然たる事実なんだから、これが一位になりましたと展開することに何のためらいもない。ただ、私はその横に「私リリー・フランキーががんばんだよ!」と書いて売るけど

(笑)。

B そうそう。それでもオレは違うんだという人は、自分が推した本を隣に並べて、こっちも読んでくれ、とアピールすればいい。

A お祭りなんだから自由にやってほしいよね。だから、うちはそんなのに参加しなくても右肩上がりで売上げも伸びてるから、オマエらで勝手にやってろ、と参加しない書店員がいてもぜんぜんかまわない。それはそれでひとつのスタンダードからね。

B でも、何かしなきゃ、という危機意識を持っている人たちにはぜひ参加してもらいたい。

A やってマイナスになることはないんだもん。成功するにしろ失敗するにしろ、誰もリスクを負うわけじゃない。ただ手間暇かかるくらい。

E リスクを負つのは増刷する版元だけだ(笑)。

A いや、仮に参加する書店員が少なくても、いまここにいる五店舗だけでやったって、それはそれで

面白いんじゃない。

C 二百冊は売れますよね。

A いやいやもつと売れるよ。全部あわせたら千冊はいく。

D そうなれば版元も喜んで増刷するだろうなあ(笑)。

**書店員が決める「2004年本屋大賞」開催**

**集え!! 全国の書店員!**

【お問い合わせ先】  
 本屋大賞仮設事務局手伝い / 本の雑誌社・杉江  
 TEL: 03-3229-1071(本の雑誌社)  
 e-mail: best1@webdokusho.com



2004年本屋大賞